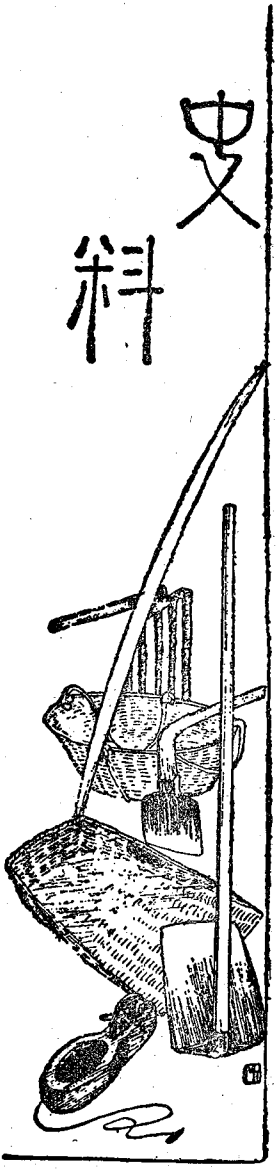

新興佛教の布教と交通の進歩

長谷川久一

謠曲『鉢ノ木』及び『藤榮』は共に北條時頼が其の出家後民情視察の爲め諸國を廻ぐり　横暴な親族に所領を奪はれて落魄して居る人の家に泊り合はせて其の哀れな實狀を聞いて同情し適當に裁斷して滿足を與へるといふ筋である　前者は信濃の國から上野の國の佐野を經て鎌倉へ歸る順序を想定して出來て居り　後者に於ては京都から難波迄の道中が辿れるのである　これで時頼の足跡がかなり廣範圍に亘つて居る事も大凡そ想像に難くないのであるが　更に當時盛んに勃興した佛教

諸宗派の布教の狀況は大體其の當時に於ける交通網の脉絡を辿らしむるに一番適當であると信ずるのである

佛教が始めて我國に傳來してから　六百年餘りを經て鎌倉時代に遷つた　淨土・日蓮・眞宗・時宗及び禪宗といふ風に總計五つの新宗派が僅々數十年の間に創められたといふのは實に空前の偉觀とすべきであらう　其れ等の諸宗派は皆逸チ早く諸國傳道に心掛けたのであるから　從つて當時幼稚であつた交通狀態に一大革新を齎らしたのは敢て無理も無いのである

併しながら五宗の中でも日蓮宗の如きは殆ど關東地方特有の宗教と稱しても差閊のない程局限されて居る　此の例外を除いては他の四宗は何れも皆京都を中心點として放射狀に進發して行つたのは勇ましき限りであつた

其の第一線路は疑も無く一號國道で近江の野路・鏡の宿から美濃の垂井に出で　其れから箕浦を經て　尾張の萱津・三河の矢作・豐川と傳はり橋本・池田から遠州の懸河を過り駿河の蒲原から木瀨川次に相模の酒匂から鎌倉方面へ向つたのである

濱名湖畔の橋本の宿等は當時相當に繁昌したものと見え曾つて賴朝上洛の際に此の宿場にさしかゝると　遊女等が一齊に立ち併んで賴朝を迎へたので　賴朝も

橋本の君には何かわたすべき

と上の句を詠んだら梶原が

たゞそま(杣)かは(川)のくれ(樓)ですぎ(樓)ばや

とつけたと云ふ話が殘つて居るが　よい宿場であつたらしい　手越の里も相當繁華であつたらしく十六夜日記にも海道記にも出て來る　こゝは平重衡を慰めた千壽の前の誕生の地といふので有名である　今の靜岡市は其の當時は見る影も無い村であつたらしく唯每月一定の期日に市場が開かれた　其れが後世發達して都會になつたので昔は富士川沿ひの蒲原の方が宿驛として遙に著名であつたと思はれるのである

當時熱田に出る迄に伊勢路を取るのと美濃路を取るのと二つあるが　伊勢路の方は山坂が多く險阻であるため日數が多くかゝるから　大概の人が美濃路を擇んだと見るべきであらう　從つて布敎に從事する諸僧も行き先を急いだから概ね美濃路を通つたゝめ　伊賀・伊勢・志摩の三國は京都の近くであるに拘はらず　新たに勃興した諸宗の傳道路線から外づれたといふ不幸を見たのである

第二の線路は北陸道であるが此の路線は若狹及び越前の兩國丈けで夫れから先は行き止まりになつて居た　蓋し越後方面に行くには中山道から信濃に出で其れから越後に交通する方が遙かに便利であつたからである　こんな風で大幹線に當る處の諸國は當時の洋行歸へりのハイカラさんたる坊さん達の敎化を受けたのであるが　幹線から外づれて居る伊豆・安房・能登・佐渡等の國は其の恩澤に浴し得ない憾みがあつた　而して兩毛二國は反へつて越後・信濃の歸へり路に通つてくれたから都合がよかつた　佐野源左衞門の所に時賴が泊つたのは信濃からの歸へりであることは前記の如くである

(上略)我此程は信濃の國に候ひしが　餘りに雪深くなりて候程に　まづ此度は鎌倉に上り春になり修行に出でばやと思ひ候(下略)

『鉢ノ木』の此の文句にある通り　冬は積雪の爲めと日が短いためと双方の理由からして交通量が著しく減ずるのが常であつたし　又當時の交通は徒歩旅行であるから三伏の炎暑を冒してすることも稀れであつたのでつまり盛夏嚴寒の頃は交通の疎なるを常とした　阿佛尼の旅行の如きも特に十一月を擇んだ所を見ても此の傾向が覗ひ知られるのである

而して京都から云へば極はめて僻遠な奥州の土地は此れ等の布教僧からは處女地として特に目指されたゝめ　此の方面の交通は一大躍進を見るに至つた　法然上人の弟子金光坊の如きは　殆ど陸奥の北端迄足跡を印したものらしい　然るに流石の金光坊も出羽國には入らなかつたと見える　蓋し出羽の國は交通系統を異にして居た　卽ち信濃から越後を經て入るべきのが順路であつたと云ふことを證據立てゝ居るのである

も一つ言及するのを忘れて居たのは甲斐國である　同地方は敢て京都鎌倉間の大往還に位して居るものではない　從つて志摩や伊豆の如くに捨て置かれそうなものであつたが　併し幸な事に北方に信濃兩國を控へ南は富士川を通じて駿河・相模に達する要路に當つて居る爲めと尙ほ武藏からも交通があるのとで　非常な形勝な地位を占めて居た　源氏の華胄たる武田氏が蟠踞したのも所以ありと謂つべしである

京都から西の方を見ればどうであるかといふに紀伊國は志摩・伊豆同樣の地位に置かれたのは已

むを得ない運命であつてそれは別として　布教の順序は近畿から海路四國に渡り讃岐・伊豫から對岸の山陽道に渡つて備後に傳道し備後から出雲・石見方面へ向つて行つて居る

九州へはどう進出したかといふに豐後の佐賀の關へ船で渡り同國一圓に傳道した　從て豐前よりも豐後の方が先きに開けたといふ奇觀を呈して居る

偖て又博多が文化の盛になつたのは近畿地方との頻繁なる交通によるの結果ではなく　同地が當時支那との交通の要路に當つて居た處から　渡唐僧や歸化僧等は概ね同地に逗留して布教したがためと見られて居る　榮西・大應等の名僧が皆支那との往復に此の地方を二度も通過して居る關係上其の後巡錫に來てくれたのは當然の事であつて、從つて筑前及び兩肥は佛教が盛になり文運も進歩した次第である

總じて云へば　新興佛教は其の主力を東國に注いだのであるから　畿内以西に於ける布教傳道は到底東方に對するものとは比較にはならないのである　從つて東北方面に向つては殘る所なく行き渡つたのに拘はらず九州に在つては日・薩・隅三州には誰れ一人として足を踏み入れたものが無かつたらしい　以上綜合して見て其の當時布教の盛に行はれた諸國は甲斐國を除けば皆今日道路が調つて居るに反し　此の時布教の行はれなかつた諸地方は昭和の今日に於て尙ほ完全な道路を認むることの少いのを覺らなければならない　而して宗教の普及やら一般交通の進歩と常に隨伴するものは文學美術等であつて要するに文明一般が傳播して行くものと見て差閊は無い　一例を擧ければ筑前から筑後を經る交通線が　伊豫から豐後を經るものと肥後國に於て合一して居るが

ために　肥後の東北部卽ち玉名・菊池・合志の三郡に涉つて旅客の往來が頗る頻繁であつて　其の餘響として菊池氏の保護の下に蔚然たる文藝が起つた事を見ても解るであらう　鎌倉幕府の創設以來　一般庶民階級に取つて適當な平民的宗教を要求して來た氣運に乘じ當時の交通系統を辿つて文化が人體の血管を血液が流れると同じ樣に隅々迄行き渡つて行つた足跡は以上を以て甚だ不完全ながら略叙し得た積りである　特に吳々も吾人が感謝すべきは　當時の布教僧は宗教上の燃ゆるが如き情熱に驅られて　如何なる天險も艱難も意とする所に非ず　否寧ろ斯る冒險に直面して勇氣益々百倍し以て衆生濟度の其の尊き至願を到達する爲め道路を開き交通を盛ならしめた其の一事である。